

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	土屋智行
論文題目	定型表現を基盤とした言語の創造性 -慣用表現とことわざの拡張用法に関する社会・認知的考察-		
（論文内容の要旨） 本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日常言語の定型表現の創造性のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。全体は、7章から成る。 第一章では、本研究で考察する定型表現に関わる言語現象の分析の基本的な枠組みとなる認知言語学の基本概念と理論的な構成を概説している。 第二章では、これまでの伝統的な定型表現の分析を概観している。さらに本章では、伝統的な定型表現の分析方法を批判的に検討し、認知言語学の枠組みに基づく新たな定型表現の分析法を提示し、次章以下で具体的に分析される定型表現の理論的な展望を明らかにしている。従来の伝統的な言語学の研究では、定型表現に関わる言語現象は、規則的に予測可能な言語現象に対し周辺の言語現象としての位置づけが与えられている。これに対し本章では、規則的に予測が可能とされる言語表現と定型的な言語表現の判断は、問題の言語表現の慣用化の程度に依存し、一見したところ規則的とされる言語表現と慣用的な言語表現の間には、グレイディエンスが存在する点を明らかにしている。本章では、このグレイディエンス的な言語現象の慣用性を一般的に規定するために、認知言語学のサブモデルの一つとして提唱されている用法基盤モデル(Usage-Based Model)の有効性を明らかにしている。 第三章では、定型表現の中でも身体部位に関わる慣用表現を取り上げ、以上の用法基盤モデルの枠組みに基づき、この種の慣用表現の意味的な拡張の方向性を分析し、身体部位の言語表現に対する修飾要素の付加や代入の統語テストにより、問題の言語表現の慣用性の程度を明らかにしている。さらに本章では、慣用表現ごとに容認される修飾要素の分布を綿密に観察することにより、日常言語の修辞性の一面を反映する慣用表現の意味拡張の方向性を分析している。その結果、慣用表現に用いられる身体部位の意味拡張には、継起関係に基づく拡張、身体部位の空間的隣接関係に基づく拡張、身体部位の機能に関わるメタファー的な拡張という3つの方向性が存在し、それぞれの方向性に認知的な動機づけが存在する点を明らかにしている。また本章では、文脈に依存する慣用表現を体系的に分析し、一見したところ文脈から独立して固定しているように見える慣用表現の意味を創発させる能力として、文脈に応じて柔軟に変化させる言語主体の創造的な認知能力が存在することを明らかにしている。さらに本章では、以上の考察を通して、定型表現の意味構造が静的なものではなく、言語使用者の修辞的な意図によって創造的に変化する日常言語の柔軟性を明らかにしている。 第四章では、定型表現の下位カテゴリーの形態論的特徴の整理と分析を通して、定型表現の形式的・意味的関連性を綿密に分析し、定型表現が個々に独立して存在するのではなく、他の表現のネットワーク的知識によって支えられている事実を明らかにしている。また本章では、個人による定型表現の拡張用法は、このネットワーク的な知識に基づく構文的特徴を継承すると同時に、この定型表現の拡張用法の継続的な発話の			

慣習化を通して、定型表現の知識体系のネットワークをダイナミックに更新していく事実を明らかにしている。

第五章では、複数の定型表現を取りあげ、その創造的な拡張のバリエーションとこの種の拡張により保持される定型表現のパターンについて分析を試みている。本章では、この分析を通して、定型表現の創造的な拡張による談話的な機能を考察している。定型表現は、音韻的・意味的なレベルでの転移によって創造的な使用が可能となる。本章の分析では、分析対象とする定型表現の主要なタイプに対して空所化の操作を適用し、そのパターンに関しコーパスに基づく収集・分析を行っている。その分析の結果、各主要な定型表現の拡張を行う際の元表現の構成要素に関し一定の傾向が見られる点を指摘している。本章では、この拡張は、元となる定型表現を喚起しやすい構成要素の配列に基づいてなされる事実を明らかにしている。より具体的に言うならば、基本的に定型表現の拡張は、問題の構成要素の配列による元表現の喚起のベクトルと、一部の構成要素の書き換えの操作に基づく文脈への適応のベクトルの均衡に基づいてなされる事実を明らかにしている。

第六章は、第三章から第五章までの分析と考察を踏まえて、定型表現を使用する言語共同体の慣習に関する知識と個人における定型表現の使用に関する知識の相互関係の考察を試みている。本章では、定型表現の拡張用法から見た個人の言語的知識と社会的な慣習としての知識の連関に関し以下の諸点を明らかにしている。第一に、定型表現は、社会的に慣習化された言語表現として固定して使用されているのではなく、状況に応じて、音韻構造と意味構造の動的な変更が行われる。第二に、そのような知識を有する個人間のコミュニケーションは、個人の持つ慣習的な知識の動的な変化だけでなく、社会的な言語知識の維持と変化・更新をうながす。本章では、個人間で行われる定型表現の拡張用法を分析しているが、この分析は、個人の持つ知識と社会的な言語知識の動的な相互作用を言語使用の観点からマクロ的に明らかにしている。本章では、さらに以上の考察に基づき、定型表現の拡張用法は、慣習的な言語の固定的な意味の伝達から創造的な意味の伝達の一面を示す言語使用である点を指摘している。

最後に第七章では、これまでの分析と考察を踏まえて、日常言語の定型表現の研究の今後の方向性と将来に残された課題を考察している。まず、展望としては、本論文で試みた定型表現の拡張用法の言語パターンの抽出の手法が、認知言語学の構文文法の研究における構文パターンの認定と意味記述に貢献する点を指摘している。また、本論文の定型表現の拡張用法の分析が、第一言語習得と第二言語習得における慣用句の理解と創造的な使用のプロセスの解明の基礎研究になる点を指摘している。最後に、今後のさらなる研究の方向として、定型表現の使用における歴史的変化（ないしは通時的な変化）の解明、定型表現の使用頻度とその拡張用法の使用頻度の差異の分析、定型表現とこれに対応するパラフレーズ表現の発話意図の相違の解明が課題として残される点を指摘している。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、認知言語学の枠組みに基づき、定型表現の形式と意味の関係と定型表現の創造的な拡張のメカニズムの解明を試みた実証的な研究である。これまでの伝統文法の研究と理論言語学の研究では、定型表現は、文法の規則的な規定からは予測できない慣習化された固定表現として、辞書部門の語彙と同様に、文法からは独立した位置づけが与えられている。これに対し本研究では、定型表現も他の言語表現も形式と意味の関係から成るゲシュタルト的な構文(construction)として位置づけ、定型表現と他の構文を、広義の構文のネットワークに基づく文法的な知識の体系として一般的に規定している点に独創性が認められる。

また本研究は、従来の定型表現の分析方法を批判的に検討し、認知言語学の枠組みに基づく新たな定型表現の分析法を提示し、規則的に予測が可能とされる言語表現と定型的な言語表現の判断は問題の言語表現の慣用化の程度に依存し、一見したところ規則的とされる言語表現と慣用的な言語表現の間には、グレイディエンスが存在する点を明らかにしている。このグレイディエンス的な言語現象の慣用性の規定は、認知言語学のサブモデルの一つとして提唱されている用法基盤モデルの有効性に実証的な裏付けを与える点で評価される。

特に本研究では、用法基盤モデルの枠組みに基づき、定型表現の中でも身体部位に関わる慣用表現を取り上げ、この種の定型表現の慣用度の程度を、修飾語の付加、代入、移動等の基本的な統語操作のテストによって明らかにしている点が注目される。さらに本研究では、慣用表現ごとに容認される修飾要素の分布を綿密に観察し、日常言語の修辞性の一面を反映する慣用表現の意味拡張の方向性として、(i)継起関係に基づく拡張、(ii)身体部位の空間的隣接関係に基づく拡張、(iii)身体部位の機能に関わるメタファー的な拡張、という三つの方向性を明らかにしている点に独創性が認められる。

また本研究では複数の定型表現を取りあげ、その創造的な拡張のバリエーションとこの種の拡張により保持される定型表現のパターンを分析し、定型表現の創造的な拡張による談話的な機能を考察している。定型表現は、音韻的・意味的なレベルでの転移によって創造的な使用が可能となる。本分析では、分析対象とする定型表現の主要なタイプに対し書き換えの操作を適用し、そのパターンに関しコーパスに基づく収集・分析を行っている。その分析の結果、主要な定型表現の拡張を行う際の元表現の構成要素に関し、一定の傾向が見られる事実を明らかにしている。この分析で特に重要な点は、元となる定型表現を喚起しやすい構成要素の配列に基づいてなされる事実を明らかにしている点にある。換言するならば、基本的に定型表現の拡張は、問題の構成要素の配列による元表現の喚起のベクトルと、一部の構成要素の書き換えの操作に基づく文脈への適応のベクトルの均衡に基づいてなされる事実を明らかにしている点が重要である。

本研究は、以上の分析と考察を踏まえて、さらに定型表現を使用する言語共同体の慣習に関する知識と個人における定型表現の使用に関する知識の相互関係を明らかにしている点が注目される。これまでの定型表現の研究では、形式と意味の関係から

成る記号表現としての定型表現の研究はなされているが、言語主体と言語共同体の知識との関連から見た定型表現の使用のメカニズムに関する研究はなされていない。これに対し本研究では、定型表現の拡張用法から見た個人の言語的知識と社会的な慣習としての知識の関係を考察し、次の諸点を明らかにした点に独創性が認められる：(i) 定型表現は、社会的に慣習化された知識に基づいて言語表現として固定して使用されているのではなく、状況と伝達目的に応じて定型表現の意味に動的な変更が行われる。(ii) 定型表現に基づくコミュニケーションは、個人の持つ慣習的な知識の動的な変化だけでなく、社会的な言語知識の維持と変化・更新をうながす。本研究では、特に個人間で行われる定型表現の拡張用法を分析しているが、この分析は、個人の持つ知識と社会的な言語知識の動的な相互作用を、言語使用の観点からマクロ的に明らかにしていくための基礎的な研究としても重要な意味を持つものと言える。

以上は、定型表現の研究分野における本論文の実証的な貢献であるが、本研究は、理論的および方法論的な視点から見て重要な知見を提供する。これまでの理論言語学の研究では、主に規則的な予測が可能な構文現象の分析が主流となっている。この点は、本論文がその枠組みの背景とする認知言語学の研究（特に構文文法の研究）に当てはまる。これに対し本研究は、これまで周辺的な現象とされてきた定型表現と規則的とされる言語現象の間にグレイディエンスが存在する点を明らかにし、以上の言語現象をプロトタイプ構文と拡張構文の動的なネットワークから成る文法体系として統一的に規定している。この規定は、これまでの認知言語学の下位理論として提唱されているプロトタイプ理論と放射状カテゴリー理論の妥当性を裏付ける規定として重要な意味を持つ。

本研究は、作例だけでなく大量の言語コーパスの使用頻度に基づいて、定型表現の慣用度と創造的な使用のメカニズムの解明を試みている。この言語コーパスの使用頻度に基づく分析は、認知言語学の言語分析の主流を成す用法基盤モデルのアプローチの実証的な研究として重要な意味を持つと言える。

本研究では、定型表現の歴史的な変化の研究はなされていないが、本研究は、定型表現の使用における歴史的変化（ないしは通時的な変化）の解明の基礎的な研究としても重要な意味を持つ。また、本研究の定型表現の拡張用法の分析は、第一言語習得と第二言語習得における慣用句の理解と創造的な使用のプロセスの解明の基礎研究としても重要な役割を担う。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等に関わる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年12月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。
要旨公開可能日： 年 月 日以降